

文学・芸術観と創造

吉本隆明の「芸術言語論」という講演の中で、表現とは何かについて語られていた。表現行為とは、表現する人と自然との関係である、という話で、つまり表現することによって自然に影響を与えていて、そしてその反作用として自分にも変化が生じる、そういう運動。

学者でもミュージシャンでも、その表現をしてるうちに「それ的人間」になっていき、だから、それが抜け落ちて、こういう風にするとうこうなるとか、言っても、それによって一緒にお前も変化してるんやで、ってことが分かってないめちゃうちなことになりかねない。

例えば、この例がどうなのか分からないが、ギターを今5年やってるという人がいて、もう一人また別に今から始めたい人がいて、その初心者にアドバイスするとして、「俺はこういう風にやって失敗したからこうやってやればいいよ」って言ったとして、でもそいつはその失敗によってそいつ自身が変わっていて、その変化したそいつが「ギターをやりだしたことによる変化がまだ起きてない人間」にアドバイスしているわけで、

その失敗したことの連続の中で「自分自身は上達していないことに不満を持っていたがでもその中で耳や指に変化は起きていて、その道中の、空間に音が響きその反作用として自分の耳が音を聞き分けられるようになり、弦を抑える指の運動から脳のネットワークも密になり、、、」という相互作用があって初めて、「こうしたほうがいいよ」と言ったときのそのやり方で上達できる「音楽的人間」になっていた、というだけなのかもしれない。

つまり、方法論だけ見ればそうなのかもしれないが、その過程でうまくいってない間に、もしくはうまくいってると感じている間にも自然との相互作用として自分の変化ももちろん起こっていて、その変化に変化を重ねた人が「このやり方がよかった」と思ったとき、それは、その時点でそこまでの変化をしている人だったから効果的だった可能性があるわけで、こんなものはタラレバとも言えなくもないが、でもその背景というか可能性を見ているか、それをわかった上でアドバイスをしているのか、というのは大きな違いになってくる。

文学・芸術観の育て方と文学作品の面白がり方

また吉本隆明の芸術言語論の講演書き起こしを見ていたのだが、フランス文学者の桑原武夫が「作者の名前を取ると誰が作ったか分からなくなるもの」を第二芸術と呼んだという話があり、そこから議論を進めて芭蕉の俳句と西洋の作家の長編小説を対比しながら文学の価値について展開していく。ここの議論は正直まだよく分

かってないんですが、その中で、「こういった問題をよく考えるまで到達した作家は、横光利一ただ一人だ」という話が続きます。

で、ここでどういったいいか分からないがすごく面白いと思いました。というのは僕は文学を読んで育ってきていないので、というかそもそも文学ってなんやねんという話からであって、例えば日本昔話系は子供の頃よく読んだりしたけどそれは文学なのかとか、だからその定義から人間との関係というかなぜ人には文学が必要なのか、みたいな部分までいわゆる文学観を育んできていないというか、だからどの角度から接していけばいいのかよくわかっていなくて、

でもたとえば以前サルトルの思想が気になり実存主義の文脈でいくつか見ていく中で、世界や外部をどう認識するか、という物の見方を反映したものとして『嘔吐』という作品があるのだとわかり、この嘔吐も最初に見たときには全然何がそんなに評価されているのか分からなかったが、それがどういう意図で書かれたのかを多少知った上で見てみると、これも文体というのか分かりませんが、そこにある表現というか、例えばよく挙げられがちな主人公が木のもとで吐き気を催すときの描写とか、どこにそれまでの作家とか作品とか思想との違いや特異性があるのか分かった気になり、そうすると読み物としてすごく面白くなる。

例えば、カフカなども不条理が～と言われることが多くて、でもただ読もうとしてみても途中で飽きてやめたりしたけど、保坂和志が「小説とは何か」を考えていく中でカフカについて言及することが多く、つまり、「あらかじめ頭の中で考えたプロットやストーリーを書き進めていくのではなくて、その場で、今その瞬間に一文一文を書いていく、その連続としてできていて、そんな最後まで書き切れるか分からないような気持を抱えたまま進んでいくそういうものとしての小説である」というような話をしていて、これまたそれを踏まえるともう一度カフカの作品を見て見たくなり、またそうやってみたときに初めてその面白さが分かる部分も出てくる。

例えば、この吉本隆明についてもここまで文学とは何か芸術とは何かその価値とは何か、ということを考えてきた人の作品としてみることで分かる面白さが恐らくあって、というか文学作品の面白さはそういうものなんじゃないかとも思ってくる。いや、これもその界限では当然の理解なのかもしれないが、そいえばちょっと前に小林秀雄が「知り合いの骨董屋が書いた川柳が、できがいいわけではないけどその人のことを知っているから面白いと感じた」と書いてるのを讀んだ。それで、「だから松尾芭蕉の俳句についても、今自分たちが感じる面白さ以上に、その近くにいた人たちにとっては僕たちが感じ取れない面白さを感じていたんじゃないか」という話だった。それを思い出した。

で、そういうことと関連して、つまり、今吉本隆明の芸術や文学に対する考え方をしているが、その上で「じゃあそんな人が作った作品は？」という文脈で見ると、どの部分に注目してどういうところを面白がればいいのかという近づき方が分かっている分の面白さがあるのだと思う。

例えば宮沢賢治にしても、「農民芸術」ということで、辛くしんどい労働を新しい芸術によって、演劇や舞踊としていこう、という意味を知っていると、詩やその他の小説の見方も変わってくる。というかこの見方が正しいのかよく分からないが、僕はその作品それ自体よりも、その内容よりも、どういうものとして書かれたのかどんな意図でどういうつもりで何を表現しようとしたのかという後ろにあるものが気になり、というかそっちに意識を向けない限りはこういった文学作品を多分最後まで読めることはなくて、その裏側にあるものというのは、例えば、家族愛を表現しようとしていたとか、なんかの葛藤を描き出したとか、そういう作品レベルの話ではなく、著者の思想というか人生観とか世界観とか芸術観とかの具現化としての作品って考えたときの、それら、そこを見ていきたい。

この感じはどういえばいいのか分からないが、例えばさっきのカフカであれば、一つ一つの作品の内容とかそのテーマとかじゃなくて、書いてる途中で間が空くともう続きを書けないと思って一晩で書き上げたとか、いつでも何か書いていたい人で、日記や手紙なども書き散らかされる中に一つの作品というのがあり、そもそも小説とそういった文章の区別がどの程度有効なのか、みたいなそういう作家の哲学とか信念とかそれが自覚されていなかったとしても、そこにある作者やその人生においてその作品がどういう位置づけとかどういう流れに置かれたものなのか、をわかった上で見ていくとか、逆に作品に通底するそういったものを感じていくような、そういう見方が面白いんじゃないかと思う。というかそれ以外の読み方で最後まで読める気がしない。

で、そうなったときにそれぞれの作家が自分の作品を超えて小説とか文学というものをどう考えていたのか、そっちを掘り下げていきたくなる。そして今、この書き起こしでは「吉本隆明が考える文学の価値とか芸術観という軸で見たときには、その問題について同じように考えていたのは自分が知っている限りでは横光利一だけ」という話であった。

そうすると他の人たちは小説や文学や芸術をどう考えていたのか気になってくるし、それも今は、「芸術や文学の価値とは何か」という広く高い一つの体系があって、それを吉本隆明の指標や軸で並び替えたときに見える景色がここで語られているのであって、そして同じ方向に進んでいた人として横光利一が挙げられているのであって、他の人から見たときには、またその人のフィルターによってこの体系は変形し、価値あるものの序列が変わりまた別の構造が出来上がる。そういったものをいくつも見ていく中で自分自身にとっての一つの芸術の価値体系のようなものが固まっていくのだと思う。

と言ってもこれは固まり切るようなものではなく、半分固まりつつ半分変形しつつまた時間がたてば固まっていた部分が解けたり動いていた部分が固まりしながら、でも徐々に輪郭ははっきりしてくるような、そういうものであって、それは文学・芸術観育てていく、自覚していく一つの運動であると言えるのかもしれない。

さっきの宮沢賢治で言うと、このまえブックオフで「イーハトーボ農学校の春」という本を見つけて、これはいくつかの短編が集まったもので、このタイトルのイー

ハトーボ農学校の春という作品を見てみると、宮沢賢治が先生をしていた農学校の生徒の日記で、ちょうど最近畑の手伝いをしていて農業思想の方も気になっていたのので、この農学校で生徒が学んでいることやどんな生活をしているのか知ることができそうと思って買ってみた。

中身はパラパラ読んでみたのだが、それとは別に宮沢賢治のことをいろいろ見ていたので、そっちを少し掘り下げていくと、この農学生の日記と思っていたものは、宮沢賢治自身が「農学生の日記風にした小説」だったことが分かった。そうなると思方が変わってきまして、これは彼の提唱する「農民芸術」という思想から生まれた一つの作品ということになる。

つまり、農学校での生活という日常に芸術フィルターをかぶせることで、ここでの時間の過ごし方はドラマのようになり、もしくはそれを言葉で切り取ることで小説にもなる。修学旅行で北海道に行ったときにはそこで見た景色のスケッチとして「津軽海峡」という詩を書いているように、これは一つの芸術だったことになる。ある生徒の日々の記録ではなく、宮沢賢治による芸術作品だった。

そうすると、ここからまた考えることができるのは、こんなスタイルで書かれたものも作品なのだということ。つまり、あらかじめプロットや世界観を練り上げ、キャラの人格を詳細に設定し、ヒーローズジャーニーの流れに乗せた小説以外にも、こういうただ日々生活する中から自然に生まれてくる、と言っても創作活動である以上勝手にできるものではないが、とはいえ、自分の自然な人生のラインから逸脱していない形として作品や表現が生まれていくような、そういうものもある。

文学や芸術について掘り下げていくというのは結局のところこれは理想論というかアイデアであっては仕方がないのだから、というのは客観的な芸術論という体系を構築したいわけではなく、僕たちが自分自身の芸術観を自覚していく、ゆっくり固めていく、ということをしたいのだから、となると当然、そこから降りてきたものとしての作品もセットになって考えられるもので、それはその人の生活の中でその体系から何らかの作品が具体的な形を持ち始めるということで、つまり、自分の表現や作品を伴わない芸術体系というのは成立していないわけで、そうなるこの宮沢賢治の農民芸術という思想の具現化としての「イーハトーボ農学校の春」の様に本人の日常と創造や創作がどうかかわっているのか、という視点で作家とその作品を見ていくという文学作品への関わり方があり、これは鶴見俊輔の「限界芸術」やウィリアムモリスの「民衆の芸術」という芸術観にも通じてくる。

自分だけが感じている面白さの共有という価値創造がある

今、横光利一を調べてみて、『機械』という作品が衝撃作的なもののように読んでみようと思ったが、吉本隆明の評価を見たらうえで見てしまうとそのバイアスがかかってその角度の面白さしか感じられないような気がした、と言っても逆にそれ単品で読んで面白く感じるような気があまりしない。

そこで思ったのが、例えばカフカについては保坂和志の見方というか面白がり方にかなり影響を受けていて、そうなるとこの人の小説に対する視点で僕もそういう作品を見る傾向が多分あり、そうなると僕が自分で面白いと感じているようで実はその前に影響を受けた人と同じ所で同じように感じているだけではないのか、という気がした。

これは例えば相席食堂では千鳥がロケのVTRを途中で止めてコメントしたり爆笑したりしているが、あれは、千鳥がそこで止めて笑うからこちらがそれが面白いのかと分かって面白くなっていくという効果が多分にあり、逆にあれをロケVTRだけを見て同じように笑えるかと言うとおそらくかなり難しい。

でもまた逆に言えば、千鳥はその映像だけを見て自分のポイントで笑っているのだから、そこだけで見れば「人の影響とかではなく自分が面白いと思った箇所で笑い、そのポイントを視聴者と共有している」ということになる。若手時代には先輩たちの感性に影響を受けたのかもしれないが、相席食堂という番組だけに限ってみれば自分が面白いと思ったものを周りに示しているとも見れて、これは自分にとっての面白さを共有しているということになる。

他の人が感じていない部分に価値を感じ、それを伝えている。自分一人が気づいたものを教えることで、周りも同じものに価値を感じられるようになる。ということは、その共有された側は、共有する側なしにはスルーしていたところに価値を感じている。価値が存在しなかったところに価値が生まれている。

つまり、これは一種の創造であり、というか、「自分だけが感じている価値を周り」と共有するという価値創造の形がある」ということ。価値を生み出すというと難しいように思えて、でもそれは周りが価値として認めているものを作る必要があると感じているからで、そうなると、みながその価値を作ろうとしているのだから同じ土俵での争いとなる。

一方で、新しく価値を見出すということもあり得て、これはまだみんなが価値と認めていないからその意味での難しさはあるものの、自分が価値を感じている対象について、その何に価値があるのかを説いていくことでその人が同じように価値を見出した時、それはそこに価値を生み出したのと同じである。

ただこれの難しいのは、技術的なことではなく精神的な部分として、まだ誰もそこに価値を見出していないのだから、厳密にはゼロということはないだろうがでも極めて少数の人しか気づいていない、というかそのセンサーを持っているのが少数で、それは面白いでも美しい役に立つでも何でもいいが、とにかく少数派であることは間違いなく、そうすると、この面白さを多分わかってくれないと思って、しかも一人で楽しむだけで満足して、外に出していくことがほとんどないのが常なのだが、そこで遠慮したり引き気味になるのではなくて、開き直って「この面白さを気づいている少数派であるが、だからこそこれが面白いということ周りに伝えることが

できる」という発想の転換ができさえすれば、それは「その人にしか生み出せない価値の創造」ということになる。

なぜならそこに面白さを見出しているのはその人だけであり、その人にしか伝えられない角度だから。そして保坂和志の話に戻れば彼は自分が感じる小説の面白さをより深め、そしてそれを共有しているのだとみることができる。それは基本的には初めは賛同者はいなかったはずで、今ではそんな見方に共感している人がたくさんいるだろうが、そんな少数の中で自分の価値観を押し出していくという状態だったのだから簡単なことではないはずで、それは後になってその見方で同じように面白さを感じている人とは大きく異なる。

これは千鳥が笑っているところを見て笑っているのとも同じことであるが、もっと言えば、お笑い芸人というのはそういう自分なりの面白がり方を周りに押し出していくことで成立していくもので、でも原液のままでは伝わらないから周囲の反応を見つつ調整していくことで、みんなにとっても面白いものになっていく。

そう考えたときに、結局は自分なりの面白がり方を大事にしていくということになる。自分が外部に対して面白いと思ったそのポイントは特殊なものである可能性が高い、これは誰かがやっているのを見て同じようにやってみたりとかではなく、特に誰とか関係なく勝手に一人でやっているようなものこそ、自分だけが感じている面白さがある可能性が高い、いや高いというよりはそれがあるのは確定していて、でもそんなことを考える必要が普段はないから気づいていないだけで、だからこそそこを注意深く観察して掘り下げ周りとは分かち合っていくと、その周りにとっては面白いというエネルギーを与えてくれる人になるのであって、この形でのエネルギーの循環も十分にある。

つまり、価値の創造や付加価値に関して、新しいものを作るだけでなく、すでに自分が面白いと感じている少数派のその「おもしろポイント」を周りに伝え、「彼らがこれまで気づいていなかったこの世界の面白さ」の発見に貢献するという振る舞い方がある。

「生きていけるな」を見つけるということ

吉本隆明の芸術言語論の講演の中で、「敗戦直後、これまで世界を知る方法を知らなかったと思い、じゃあ世界を認識する方法としてどういうものがあるのか、という考えの中で、古典経済学を選んだ」というくだりがある。

で、アダムスミスから、リカードやマルサスを読んでいく中で、世界を把握する方法が分かったという体感になった。その上で、文学青年だった吉本隆明はこれを自分の文学的素養と接続できれば、生きていけるなって思ったみたいなんですね。

この「生きていけるな」という感覚が非常に重要な感じがして、つまり、僕はやりたいことが分からないとか言ってたわけですが、それっていうのは最近これまたわかってきたんですが、やりたいことがわからない、というより、「やりたいことをやって大丈夫な気がしない」という、こっちだったんですね。

つまり、めちゃくちゃ具体的なレベルでは、断片的なレベルでは、別に全くやりたいことがないわけでもない。それこそプログラミングとか株とかやってみたかったし、キャッチボールとかも好きなので、今すぐできるって言われればそれで嬉しい。

でも、じゃあそれをやっていたとして俺の人生はどうなるのかという問題が常にある。本当に好きなことを好きなようにやっていいのであれば何も問題はないが、そうは思えない、今適当に好きなことしてるだけだとこの先だいたいばいことになる、でもそのすり抜け方というか身のこなし方というか、それがわからない、つまり、全体の流れに沿ってちゃんと就活してちゃんと就職して毎日8時間週5日働くか、今好きなようにやってこっからグズグズになっていくか、どっちかしかないと思っていたということになる。

どっちかしかないというよりはそれ以外が何も見えていない、それを全部ひっくり返してやりたいことが分からない、という出力になっていた。つまりやりたいようにやって生きながらえるビジョンが浮かんでいなかった。そしてこれがこの吉本隆明の「生きていけるな」と恐らく近い。

僕にとってこの生きていけるな、というのは、人生の軸とか方向性的なものを考える中で、少なくともしばらくはこれをよりどころにしていけそう、という道具を手にした感覚があったことや、ブログというメディアが個人的な生とその周囲の人間の喜びをつなぐことのできる装置だと腹落ちした時に「これでいけそうか」と思ったんですね。

そこには、自分の意志や意欲、希望、信念、物語、知識、情報、技術、経済、出会い、感情などをすべて同じ枠組みで扱うことができるという気付きがあり、それは受け入れざるを得ないような気がしていた、それまで生きてきた中での世界や社会に対する疑問とか違和感とかフラストレーションとか、漠然とこうありたいと思っていけど無理そうな気がする姿とか、そういったものがこのメディアの上では全部可能になるという確信ができたのです。これも一種の悟りではあるのかもしれない。悟りが何とかは全然わかりませんが。

で、やっぱりそういうものを見つけていくというか自分で持っていることが大事というか、ブログはある種その確信の現れというか具現化的なところもあり、その確信が起こってくるような場として捉えてもいる。

もっと言えば、好きとかやりたいですらないと思っていて、それはこの講演の中では、

「自分が何をすればいいんだって、まあ、さしあたり、いろんなことしないといけ
ないでしょうけど、まず、もともと戦争中から持っていた文学的素養っていうやつ
を、くっつけるって言いますか、連結するって言うことをまず仕事として、やるこ
ととして、やろうと。それができないならば「おれは生きている甲斐もないよ」
と。」

という話がありますが、このレベルなわけで、だからこれは麒麟の田村氏の「味の
向こう側」じゃないですけど、「好きとかやりたいの向こう側」というか、「好き
の超越」というか、その雲を突き抜けるところにあるというか、そういうものなん
ですよな多分。極端に言えばこうじゃない生き方なら生きてても仕方がない、ぐら
いの。

で、じゃあ吉本隆明がやろうとしていたことは、「古典経済学的観点による世界認
識の方法」と「自分の文学的素養」を結びつけることで、それは僕で言えば、「こ
の世界とか宇宙はどうなっているのか」ということと「その上でじゃあ僕たちはど
う生きていくのか」というこの接続。

これを今考えていて思ったのはちょうど最近読んだ『近代農業思想史』という本
に、場所性についての議論があり、そこでは農業の特性として「地域性」を取り上
げ、その流れで「事業の効率化や利潤の最大化を図る中で、特定の個人や場所が抱
えるニーズには目が届かなくなっていく」くだりがあり、そこがまさに最大のポイ
ントで、じゃあ結局自分はどう生きたらええねんと。

この世界がどうなってるとかの話はいくらでもあって、というかそれが学問の存在
意義とか方向性で、でもそれは存在について語るだけで、「なぜそうあるのか」

「その上で個人はどう振舞えばいいのか」についてはもちろん教えてくれない。そ
れは当然で、学問は個人の意思や趣味嗜好を明らかにしたいわけではないから、だ
から構造としては、いろんな本とか文献とか言説はある領域までは登っていく方法
を教えてくれて、スタート地点から途中の踊り場みたいな広いみんながゆっくり出
来たりするようなスペース、そこまでの行き方は教えてくれるが、それ以降進んで
いくのは自分で考えるしかないわけで、というかだからそれが嫌なら、その後はツ
アーに参加してガイドの後を何十人何百人で歩いていけばいいわけで、でもそれが
面白くないなら自分で編み出すというか見つけていくことが必要になり、そこでま
ず足掛かりと出来るのが「この世界がどうあるか」「人間とはどんな生き物か」と
いうことで、それを踏まえて、じゃあ自分としてどう振舞っていくのか。

で、その時の道具や武器として僕はこれまでゆらぎとか、未完成性とかエントロ
ピーとかを引っ張り出してきて自分が使えるように編集していった、と今になって
後から解釈することはできる。人それぞれそこに自分がやらないといけない理由と
いうか、他に誰がやるねんみたいなものがあって、多くの人を探し求めているやり
たいことの正体はこれなのではないかと思う。

『知の論理』という本風に言えば、僕たちが何かを認識するときの論理というのは
言語によって決まってくるもので、例えば、「りんごがある」と思ったとき、それ

は日本語という言語空間に「りんご」があるからその認識が可能なのであって、そうじゃない言語では「果物」とか「赤いもの」という認識になるかもしれない。古典物理学という宇宙では「止まっている」ように見える物質も量子力学という宇宙では「微妙に揺らいでいる」わけで、ここの論理が変われば認識も変わってくる。

逆に言うと、今の論理でとらえきれない複雑なもの、例えば人生とか、これらについてはその論理の方を更新していく必要がある。というよりも、この論理が未熟だから「生きていけるな」を感じられないのであって、それは誰かが唯一解として与えてくれるものではなく、これまで生きてきた文脈やこれからの方角も含めて、それぞれが気持ちよく過ごしていくことのできる「人生や世界や社会を認識する枠組み、論理、体系」として随時更新していくもの。それは自分の学問を作るとも自分の方法を作るとも自分の人生を生きるとも言えて、もちろん文学や芸術について考えるのもこの一つである。